

---

# Diary

悦威カイ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Diary

### 【Nコード】

N6817U

### 【作者名】

悦威カイ

### 【あらすじ】

彼女が死んだ　　彼女の闇を…覗いて見ようと想っ…

ある少女の日記に綴られた、想い、大きな闇。

親友の少女が、暴く。なぜ…彼女は死んでしまわなければならなかったの…？

この話は本当に合った事を少し基にしたフィクションであり、  
実在の人物、団体、事件とは一切関係ありません。

未成年の飲酒、喫煙は法律で禁止されています。  
そのような、表現が出てきますが実際にはまねをしないでください。

## 序章（前書き）

この小説を読む皆様へ

本当の悦威カイ、学生をやってる悦威を知る方は読まないのをおススメします。

バッドエンドで終わらせる予定です。苦手な方はbackを。

R指定ですが、エロくはありません。

未成年者の飲酒、喫煙は法律で禁止されています。

主人公の行う事は真似しない方が身の為です。

## 序章

彼女が死んだ

親友の彼女。

強く気高く、綺麗な親友。

私の自慢だった。

腹部を刺された失血死。

猫のように、自由で、

少し、寂しがり屋だった彼女。

親友なのに…私は彼女の事、何も知らない

だから…

《これ、日記？つけてるの？》

《うん、意外？》

《うん。かなり…ねえ、見てもいい？》

彼女は不敵に微笑んだ

《アタシが死んだら見てもいいよ …》

だから…彼女の闇を…覗いて見ようと想う…

如月 キサラギ 美緒理 ミオリ 享年16歳

腹部を刺された為の、失血死により死亡。

早朝。裏路地に蹲った状態で、発見された。

事件性があり、今警察は、彼女の足取りを捜査中。

なぜ 彼女は死ななければならなかったの ?

私、桔梗 キキヨウ ナオミは、彼女の死の真相を、暴こうと思つ …

## 序章（後書き）

初めての推理物。が、がんばります。  
応援よろしくお願いします。

2011/7/7 悦威カイ

## 1 中学生活

4月8日

入学式。今日は肌寒い…

でも、桜が綺麗だったのはよく覚えてる。

1人、桜並木を見ながら、歩いた。

「だよね〜!!」

「あははっ!!」

はしゃぐ新入生（じゅしせい）の声

眉が、歪む。

今日一緒に行くはずだった、友達にドタキャンされたから…

それも今朝の事。

私は一人で行くしかなかった。

《新入生代表》



退屈な入学式が始まる。

退屈な言葉。壇上に上がる彼女は顔見知りだった。さぞかし先生に評判が良かったのだろう。

教室へはいる。すると騒がしかった教室は鎮まる。

【如月 美緒理】

その名前のある席に座る。

「お前」

隣に座る男子に声をかけられた。

顔は知らないけど、同じ学校だった気がする。

「席違くねえ??」

これは意地悪とかじゃない。

「違くないわ」

苗字が変わったのだから。仕方ないでしょう？

この事は、誰も知らなかった。教えなかったから。

そして、退屈な日々(せいかつ)が、また始まった……。

## 1 中学生生活（後書き）

美緒理は、両親が離婚しました。小6の時です。

「私、桔梗ナオミ。ヨロシクね!!」

友達が出来ました。

桔梗ナオミ 主席番号335番

デカい。見た目ガラ悪い。どことなく、避けられている…

でも…

「私は、シオンちゃんが好きなんだ。」

性格がよく、趣味が一緒だった。

「アタシは、ラルが好き。メガネが好きなんだ。」

「ラルもかっこいいよね、なんせ主人公だし。」

よくつるむ様になった。

「お笑いも好きなの?」

「うん。カッコイーでしょ!!」

「え?コッチ??」

男の見る目は壊れていたけど…

いい奴だった。

「桔梗さん…」

「何？」

只クラスメイトには、嫌われていたというか…避けられていた…

「私小学校まともと言ってなくってさ。」

彼女は先生にも嫌われていた。

でも…

心の奥までどす黒い私とは…違った…

## 2 (後書き)

桔梗ナオミは一時期虐められていて、それが原因で不登校だったのです。

でも友達はそこそこいます。

### 3 (前書き)

如月美緒理の裏の顔です。

「レオ〜!!!」

「ご指名ありがと〜!!!お姫様？」

ココはホストクラブ。

「レオさん、社長が呼びびです。」

「うえ〜…じゃあまた来るね…」

「うん。待ってるよ？」

アタシは…

「おう。美緒理、」

レオとして、性別を隠しココのアルバイトをしている。

「何の用？社長」

「何の用って…ちょっと上の奴と色々あって…」

「またあ!？」

上の奴とは、いわゆるヤザさん。

アタシ…いやオレは…その世界に顔がきく…

「まじで、たのむよ…」

腕を掴まれる。はあとため息を一つ吐く

「いいけど…高いよ。」

強く。輝く瞳に射抜かれた奴らが沢山いる…  
百合の様に気高く…薔薇の様に美しい容姿…

創り物の灰色の瞳が…見下ろす…薄汚れた世界…

「オレを使わせてあげるんだから…それ相応の代金が…ね。」

張り付いた薄笑い。

靡く、灰色の髪…

そして…その腕っ節の強さを…その世界が惚れていた。



### 3 (後書き)

□□はおまっきし脚色してます。

【如月美緒理（16歳）】

××中学卒業後 高校入学、現在在学中だった。

死因は腹部を刺されたことによる、失血死。制服を着ていた。  
午前零時頃、近所の住人が発見した。

身体的特徴

長髪、黒髪にメガネ 学校ではあまり目立たないタイプだった。

しかし発見時は灰色の髪だった。

傷は腹部の傷だけ、強姦などの可能性はなし。

通り魔による犯行に思われる。

家族構成

父武田聡（47） 母如月美香子（40） 弟如月辰巳（13）

両親は四年前に離婚。親権は母、美香子。

【養育費はここ二年ほど、父聡は払っていない。】

「何で彼女の髪は灰色だったんですか？」

「知るか！！」

「このコ美人だねえ…」

「今、関係ないだろ！！」

「いやあるだろ、こんだけ美人ならストーカーとか…」

「ってか何で彼女の足取りこんなにつかめないの？」

「ミステリアスだよ、惹かれちゃうね。俺。」

「お前帰れ！！このロリコン！！」

警視庁捜査一課、如月美緒理について調べている所…

とりあえず五人位…

リーダー三浦 真一

率いる。岩屋 健二 一之瀬 計。

彼らたちも…如月美緒理の死の真相を見つけ出そうとしていた…

「親友の桔梗ナオミ…彼女も少し気になるよね。」

ナンパっぽい、健二が言った。

「話聞いてみます?」

健二の意見に、新人の計は賛同した。

「お前ら言葉づかい気いつけるよ?」

三人のツツコミを担当することになった真一はため息交じりに言った。

「この事件、解決するとイイですね…」

計は悲しそうに言った…

## 4 (後書き)

次回もヨロシクです。

感想評価お待ちしております!!

「桔梗ナオミさんは御在宅でしょうか？」

「あ、はい。ナオミ……！」

そう母の声が聞こえたところで、私はあわてて日記を閉じた。

証拠隠滅とか、そうじゃない。

私は……

（大人を信じられないだけ）

「何でしょう？」

彼女の真似をして伸ばした髪を結わえ、  
堂々と、姿を現した。

「警視庁の者です」

刑事は見て見たかったけど、こんな形で見たくはなかった。

.....

《何で彼女が灰色の髪だったのか、知っていますか？》

《いいえ。知るわけない》

「無駄足だな。何も知らなそうだ」

「ガラ悪そうだったな、あの子」

「今は関係ないだろ」

「でもあの子が見つかったのは、かなりたちの悪い繁華街だったんだぜ？」

「根はいい子だよ」

騒ぎに向かい、計はそう言い放った。

「そんな感じがした。」

無暗に歩とは疑いたくないんです。と、そう続けた。

如月美緒理、殺害の謎

全ては、ナオミの握る彼女の日記に眠る…



## 5 (後書き)

お久しぶりです。二次創作小説に専念していました。すみません。亀更新ですが、またよろしくお願いいたします。

悦威カイ

## 6 美緒理の秘密（前書き）

しばらく過去編？

## 6 美緒理の秘密

「おはよう」

「おはよう！美緒」

美緒の家、だるそうにベッドから体を起こした。それはまた、色っぽい柄にも見えた。

「顔色悪いよ？」

「え？風邪ひいたかなあ…」

そう言つて、自分のおでこを触る。

「熱あるかもあ。学校休む」

「え〜！！」

「だから、」

そう言つて、ふわりと微笑んだ美緒理

「看病ヨロシク。ナオミ様」

少し大人っぽい彼女。

その頼みは、断ることはない。

私だつて、学校は嫌い。

.....

「はい、おかゆ。食べれる？」  
「ん」

重い体をゆっくり起こした。

「美緒のベットさあ、広いね」

「ダブルベットだしね」

「え、やっぱり？」

ナオミは驚く。

アタシは少し笑いながら、

「なんでわざわざ大きいのかったの？って顔してるけど」

そう、突いてやるとナオミが観念したように「当り」と呟いた。

「…同居人も寝るからね」

ので、あることをカミングアウトした。

「え…同居？」

「ん。アタシ一人は好きよ。だけど…」

フリーズするナオミをよそに、

ベットわきにある、煙草に火をつけた。

「所詮、人は一人じゃ生きていけないしね。気づいちゃったから」

そう言ったところで、

「ただいまあ!!」

能天気な男の声が響いた。

《出て行け！！あんななんかもう知らない！！》

《言われなくても出て行くよ》

そんな母親の言葉と、自分の発言を想い出した。

母と仲は悪く、喧嘩したすきに出た言葉。

《死ね》そう言われたこともある。

落ち着いた様子で、そのまま家を出たが、母にも恩はある。だから仕送りとかしてみたが、全て折り返し帰ってくる。

頑固な母。

ゆらゆらと消えてゆく薄い煙を見ながら、一つ息を吐いた。

「ただいまあ！」

そんな能天気な男の声が聞こえる。

私が休んでいるのは知らない。

誰もいなくても、律義にそう言ってしまうバカ男。

はねつかえりで捻くれたアタシが家を出た時、

わざわざ車を出してまで迎えに来てしまい、

家に居座り続けるアタシを養い続けるバカ男。

それが…

「あれ？美緒。今日休み？」

サイオンジ  
西園寺 怜牙

ふざけた名字だが、それが奴の本名。

夜間高校に通う、頭は良いが受験日に寝坊をした間抜け。名門校からの推薦も、シカトこいた変わり者。

「おかえり、サイガ。」

略してサイガ。西園寺のサイと、怜牙のガを取ってサイガ。そう呼ばれている。

そして、この家の家主。

「そちらは？」

「友達、来たねえ手で触んじゃねえぞ、手え洗ってこい」  
「わかった。」

そう言われて、マジで手を洗いに行くサイガ。

「か…彼氏？」

ナオミに問われた。

「…いや？家主と居候。」

そう答えた。

スキとかそんな感情は知らない。

家主と居候

それがアタシたちの関係を表すには一番いいと思う。

それが…

セフレ

とか？





## 7 (後書き)

バイトをしてきた帰り。

サイガの一日のサイクルは…

バイト 寝る 学校 バイト 寝る

という生活。

8 素直になれない少女(前書き)

禁煙中。

## 8 素直になれない少女

「あ…えっと、帰るね、バイバイ!!」

「え？ナオミっ!？」

そう部屋から出て行くナオミの背中を見て、  
只、寂しくなった。

.....

それから、ナオミはアタシを避けている。

「美緒！」

「朔夜！」

折原 朔夜

アタシの裏の顔を知る、数少ない人物の一人。  
この学校では、唯一の人物。

見た目はハデ。天然の明るい茶髪。天パ。

綺麗だがつり気味の目。

彼女はいつも、外見で損をしている。

ほら、もう既に。

真面目そうなアタシと話すだけで、注目されてる。

「カツアゲなんかしてねえつつうの!」

「あははっ」

彼女とは、幼馴染。

「…でーさあ…」

「何よ」

指で顎を掻きながら、目を泳がす朔夜。

彼女は緊張しているときはこうする。全く単純な女だ。

「英語のノートなら忘れたわ」

「え!?!」

アタシの答えにショックを受ける。

「教科書ならあるけど」

「貸して!?!」

「五百円。」

「高い!」

「じゃあ大負けして、百円」

「金をとるな!?!」

「じゃあ貸さない」

ふいと、教室に戻ると、足を速めた。

「ちょっと待って!?!」

朔夜は呼びとめる。

「払う！払うから！貸して！！」

私は朔夜の百円と引き換えに、英語の教科書を手渡してやった。

「美緒、お前さ」  
「ん？」

朔夜は心配そうな顔をする。

・・・

「まだ、あのバイトやってんの？」

その問いに、

「ええ」

心配そうな朔夜に向かい、

「やってるわ、生きる為に」

盛大に頷いてやった。

「心配ありがとう」

そう、礼をして。

「あ、そうだ美緒！！」

「今度は何？」

げんそうなアタシに戸惑いながらも、昨夜は言った。

「桔梗ナオミと、喧嘩してるの？」

そう言われて、

「まさか。」

そう答えてやった。

9 (前書き)

刑事サイド



「自殺者…?」

真一が煙草を落とし、言った。

「あづっ!!」

「大丈夫ですかあ?」

「ああ、自殺者ってのは?」

真一はキメ顔をしているが、これは小説なので顔は見えません。まあ、それは置いといて、その情報を持ってきた計が言った。

「如月美緒理と同じ中学の、真野京子まのきょうこですね。」

「原因は?」

「いやあ…彼氏と別れたらしいです」

そこまで行って、沈黙。

「え、それだけ!?!」

「はい。」

その答えに、少し呆れながらも

「如月との関係性は?」

「同じ部活だったみたいです。美術部」

「はあ、仲良かったのか？」

「…同じ部活だったみたいですよ」

「仲は？」

「同じ部活だったみたいです」

ここまでやり取りを、無表情で行った計とは違い、少し、真一は息が上がっている。

「煙草やめたらどうですかあ？」

とか暢気に計は言ったが、その少し湧いた怒りを抑え込み吐き出すように

「つまり分からないと？」

「はい。そうです。」

分かっていたら最初から言いますよ、と、計は付け足した。

真一は、眉間にしわを寄せながら、煙草の煙を思いつきり吐き出した。

「さつさと、調べてきやがれ！！あと健二を起こせ！！」

そんな、怒りと共に発した命令を

「へえ〜い」

と軽く返事をした計は、今まで事務椅子を並べて爆睡してる健二の

「俺にもサンデー読ませろお」  
「ぐえっ」

腹に乗り、一つ目の命令を果たした。

「重っ！うえっ！何か出るかもっ！！！！」  
「くだらねえよ！早く行きやがれこのやるおおおお！！！！！！！！！！」

そう二人を追い払った後、

「真面目に調べてるの俺だけじゃん？」

煙草を、灰皿に押し付けながら真一は言った。

10 (前書き)

…あれ？今設定を見直したら。  
GL要素も。あるうことかBL要素もあった。

「こんにちは。警視庁捜査一課の者ですけど…」

健二、計がやってきたのは如月美緒理。実家。

「いないな。」

チャイムを押したが、それは虚しく響き渡る。

「帰りましょー」

計は言うが、健二は断固としてそこを動かない。

（娘が美人だからって、親までそうとは限らねえってのになア…）  
美緒理の母親の写真は出なかった、だからまだ健二は期待している。  
全く非常識な奴だと、先輩であるが、彼に呆れた。

「<sup>ウチ</sup>家に何か用ですか？」

一人の少年が言った。

ああ、弟だろう。

皆はそう思うだろうが、写真と顔が違う。弟じゃない。彼は違う。

「あの…君は？」

健二は聞いた。

「久瀬力也くせりきや。この家の如月辰巳たつきみの悪友です。」

その答えに、二人は顔を見合わせた。

「その…辰巳君とやらは？」

「今、来ると思います。途中チャリのチェーンが壊れたから。引いてくる。」

計の問いに、力也は淡々と答えた。

「あ、来た。」

力也がそう漏らすとなぜか、計は深刻そうな面持ちになった。

(動揺している…?なぜ…)

健二は疑問に思う。

それと共に、計の名前を呼んだ。

「けつ、健二さん。」

計は俯いたまま言った。

「俺、アンパン買ってきます!!」

「え!?!ちよっと!?!」

そう言っつて、走り去ってしまった。計。

追いかけてようとは思ったが、やめた。

「…どちら様ですか?」

写真の通り、姉とは全く異なる容姿をした辰巳は言った。

「あ、警視庁捜査一課の岩谷健二と言います。」

そして、警察手帳を見せた。

「刑事さんだったんだ…」

辰巳は言う。健二はどこか計が心配であったが聞き込みを続けようとも思った。

すると、驚きの言葉が立つ身から発せられた

…

「じゃ、計さんも刑事になったんだ」

その発言に、健二は驚いた。

そして重く、辰巳に問う。

「知りあい…なの？」

「え、はい。姉貴の友達の彼氏とか言ってる…よく家に来てましたよ」  
「名前は!？」

その答えを聞き、食い入るように健二は聞いた。

「名前…？」

「その、友達の名前だよ!真野京子って言う名前じゃないか!？」

その核心に、



「そ…そうですけど」

健二は身を震わせた。

・・・

「計」

そう名前を呼ぶ。その場所はコンビニ。

「お前「ごめんなさい！」

被せるように、計は懺悔した。

「…俺は、美緒理の死の真相を突き止めようとこの操作に協力したのは、偽善なんだ」

そのまま計は話し続けた。

美緒理との関係。真野京子の事。すべて…

そして…

「美緒理は…レオと言つてもう一つの名前を持っている…」

如月美緒理の裏の顔のことも…

12 (後書き)

支離滅裂ですみません。

### 13 Diary

「え…!？」

ナオミは自分の目を疑った。

(ページが破けてる…?)

なぜ?どうして? と、何度もページを行き来するが、無意味であった。

1週間分であろう。10数枚ほどごっそりなくなっている。

「なによ…」

ナオミは、美緒理の日記を壁に向かって投げた。

日記を読んでも何もつかめず、何も変わらないまま…

無駄な時間を過ごしてしまったのだろうか?とナオミは自己嫌悪に陥った。

そのまま蹲り、数分経った後、気づいた。

自分が無作法に投げた湿ったタオルの上に落ち、湿っていた。

「あ…」と重く呟きながら、拾い上げた。1枚。変色したページに気づく。

「何…これ…」

思わず声を上げた。

【ナオミへ】

言葉があつた。

それが…全ての事件を収束する・・・重要な証拠であつた…

【ナオミへ】

美緒理の言葉を一つ一つ……  
何度も何度も読み返した。

……

ナオミへ

たぶん、もう私はこの世にいないでしょう。  
自殺じゃないよ？多分、殺される。

私のある秘密を話したいと思います。私には、予知能力のような物  
があります

人が死ぬ夢。何度かあったけど、私には関係ないからシカトしてい  
たの……けどある日

「一度目の私の死」を視たの。

学校の屋上から落ちる夢……私は死にたくなかった。  
だから……「現場」に近づかなかった。

そしたらその日……私の代わりに……「京子」が死んでしまった。

今でも覚えてる、早朝、電話がかかってきて京子が自殺したことが  
伝えられた……

「私の代わりに」

死んでしまった「京子」

バランス  
世界を崩さぬように、京子を殺したの。

後悔した。本当なら京子は結婚して、子供を産んで、母親になった  
かもしれないかった。

私はそれを壊したの。自分の身勝手に。

そして「二度目の私の死」を今、視たわ…

繁華街で、私は出勤途中だった。そこで刺されるの。

もう、逆らわない。流れるの…

このまま…

私は京子の元へ逝くわ…

ゴメンね、ナオミ…今までありがとう。

美緒理

・  
・  
・

「…みお…り…」

暗転

私はそのまま、警視庁へ美緒理の思いを運んだ。



それから…ホントあつと言つ間に事件は終わった。

「レオ」の事が分かつた途端、彼女の客を調べ上げ、犯人は男。

彼女に何度か求婚プロポーズをしていたというのが彼女の仲間からわかつたことそれを断られたことに腹立て、復讐をしたという。

「死刑だ!!絶対!!」

何度か彼女とそれなりの関係を持っていたサイガは、訴えた。

それから…だいぶ後の話…

「晴れたねえ、ホント」

ナオミは微笑んだ。

「アンタの大好きな大福、食べてね」

そっと、真っ白のお皿にあんこがたっぷり入った生菓子を載せた。

「おばーちゃん、お水持ってきたよお」

「ありがとう」

孫の持ってきた水をくみ、花を手向ける。

美緒理のように、美しく、気高い百合の、花。

「ん？ライターがつかん」

「かしてみなさい」

線香に火をつけ、ゆらゆらと揺れる煙と、  
彼女が好んで吸っていた、煙草を指して…

「懐かしいね、美緒理」

出逢い、別れ

それは一瞬すくの事で

「あの世ではできれば会いたくねえな、美緒理」

彼女の夫は、柔らかく言った。

「美音みおんはここに居るよお？」

孫のその言葉に、

「みおん」じゃなくて美緒理

爺ちゃんの片思いの相手だよ、すごい美人さんだったんだ…優し  
くてね

美音みおんもそんな人になれるとイイね…」

幼い孫には難しかったらしく、顔を歪ませたが「うん」と元氣よく頷いた。

ゆっくりと腰を浮かせ

「ほら」

差しのべられた恩を受け

ゆっくりと、

（幸せそうだ、ナオミ…良牙…）

そんな彼女の声が、聞こえたような気がした。

そしてまた、ゆっくりと

一文字一文字書き続けている…

END .

## 15 (後書き)

afterword あとがき

おわた…

それが一言。

グダグダです。(読み返した)

その捕捉っぱいのは気が向いたら…その時はよろしくお願いいたします。

推理っぱくねえ…

こんなのもアリでしょうか…？

また、お会い致しましょう。

悦威カイ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6817u/>

---

Diary

2011年10月2日11時48分発行